

リボンの起源とその装飾性について

著者	筒井 京子, 島貫 真寿美, 守屋 史佳
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	22
ページ	17-34
発行年	1987
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001771/

リボンの起源とその装飾性について

The Origins of Ribbons and thier Ornamental Applications

筒 井 京 子 島 貫 真 寿 美 守 屋 史 佳
Kyoko TSUTSUI Mashumi SHIMANUKI Fumika MORIYA

I は じ め に

リボンは、英語でリバンド (Riband) ともいい、語源はフランス語の古語にリバン (Riban) とあり、ゲルマンチュートン語に由来している。

リバンドとは、“結ぶ”とか“縛る”という意味から、リボンの歴史は古く、既に新石器時代のメンヒル (立石像) やクレタミノア文明のフレスコの女性の胸紐や頭飾として使用されていることからリボンは、今日のバンドやサッシュベルトの起源ともいわれている。

しかし、ヨーロッパにおいて、リボンが装飾として一般に導入されはじめたのは、16世紀以降リボン織機が出現してからであり、素材も絹、木綿、ビロードなどの紐のことをリボンと呼称されてからである。

我が国において、リボンが流行したのは明治以降で、日本の長い伝統の和装文化の中に洋風化が急速に取り入れられた時代であり、女学生の髪飾りや上層婦人の洋装の装飾などにも使用されていた。その後、リボンの用途は広く、服装のみならず贈答品の外装など、今日においても幅広く利用されている。

特に近年は、服装や髪飾りその他アクセサリーなど、日本をはじめモードの発祥地であるパリ、ミラノなどのファッションにも、リボンを扱ったデザインが多くみられる。

このようなリボンの流行により、市内の各デパートなども切りリボンやリボンピン、シニョンキャップなど豊富に置かれ売り場面積も広く、1600種類の切りリボンなどを取り揃えている。

そこで私達は、懐古調とも思われるこのリボンの流行とともに、現在の若い人々の美意識についてのメンタリティー (心性) を追求し、服飾指導上の参考として研究を行った。

今回は、リボンの装飾が最も華麗にみられた、ヨーロッパの16世紀から18世紀を中心に西洋服装史より調査研究を行い、リボンの起源とその装飾性およびリボンの変遷について史的考察を行ったので報告する。

II 結 果 と 考 察

1. リボンの起源

リボンの歴史をたどると、衣服のはじまりとされる紐衣 (ちゅうい) があり、ヨーロッパにおいては、既に先史時代の残存史料から男性は体に1本の帯を結び、狩猟用の武器を下げたり

獲物を縛る必要性から用いる実用性のある結び紐として存在していたと考証される。⁶⁾

写真¹⁾は、新石器時代（紀元前3000年頃）の男性像を刻んだメンヒルである。埋葬用の偶像で極度に様式化されており、マントに二重帯もしくは房のついた腰帯を締め、垂れを前に下げている装いが認められる。

古代オリエントのエジプトでは、当時のヨーロッパより高い文明水準にあり、特に新王国時代（紀元前1580年から1085年）の第18王朝以降は、あらゆる面において最高潮期を迎え、装飾性も高まった時代であった。写真²⁾のように、王や王妃は「王のハイク」と名付ける薄手リネンの優雅なドレパリー（巻き衣）をまとい、権力の象徴である丈高の頭飾りやかつらをかぶり、刺繍や金・銀装飾を施した前垂れ、色ものの腰帯、多彩なりボンを結んだ装いがみられる。

写真1 新石器時代メンヒル（BC3000年頃）

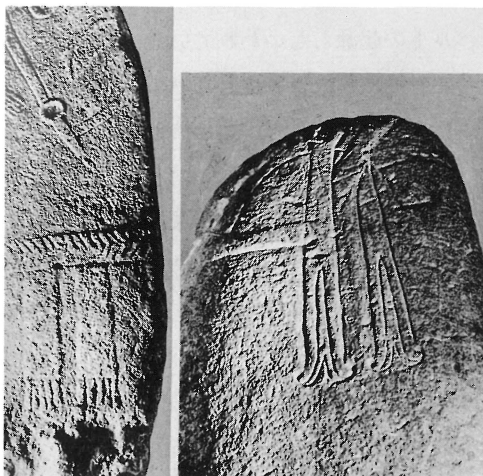


写真2 古代エジプト第18王朝王と王妃の服装
(BC1350~1340年)



また、写真³⁾のエジプト国王と王妃の服装はペルリース（ケープ）をまとっているが、この両者のみが胸元で色もののリボン結びで飾り、リボンの腰帯をしていることから、高貴な身分や権力・威厳などを示す標としてリボンが結ばれていたことが伺える。

次にミノア時代興隆期（紀元前1750から1400年頃）のクレタにおいては、女性が社会で重要な地位を占め男性と同等な生活をし、古代史に類例をみない程恵まれていた。

写真⁴⁾は、ミノア後期のフレスコであるが、発見当時の19世紀パリモードによく似ていたことから「パリジェンヌ」と呼ばれた。この女性画は、胴着の下を1本のリボンで固定し、衿首には垂れをつけた大きな蝶結びが飾られ、透き通った胴着の前面には青や赤の幅の狭いリボンがつけられている。当時の女性のスタイルは、ウエストを細く引きしぼり、スカートは釣り鐘型に広げスカートの下には既にフープをつけていた。

写真⁵⁾の3人の宮廷女性たちのフレスコも、あきらかに典型的クレタ・ファッションのスタ

写真3 王と王妃の服装



写真4 パリジェンヌフレスコ（後期ミノア時代）



写真5 宮廷女性の服装（後期ミャノ時代）



写真6 ナルシュ王即位の浮彫りササン朝時代（B C 1540～330年）



イルをしており、髪を1本のリボンで結びあげて飾っている。クレタの服飾は、古代オリエントのどの地域にも増して優雅であり、この時代は紡織工場もあったと考証されることから、リボンも多く使用されているのがみられる。

タイルが出現する。

スラッシュとは、上衣の身頃や袖、脚衣に施された人工の裂目、切込んだ開き口のことでドイツで流行し、ヨーロッパに広まった装飾法であり、そのスラッシュを留め合わせるなど、リボン飾りが装飾的に活用されてくる。

写真⁶⁾8の女子の服装は、スラッシュした袖一面に赤のリボンで飾られているが、この他、白、茶、黄など細いリボンの蝶結びがついた服装など様々みられる。髪型も写真のようにリボンで巻いたり、編み込むという工夫がされている。

また、フランス小姓の服装(写真⁴⁾9)は、シュミーズにプールポアン、ショースを着装しているが、このショースとプールポアンの胸に小穴を開け、先端に金具つきの麻や絹のリボンを通し、上下を蝶結びや半蝶結びにしている。袖のスラッシュは、リボンで結び合わせている。

また、写真²⁾10は傭兵スタイルであるが、靴下を細長いリボンで膝や足のまわりを巻き、外側に蝶結びで止めているのがみられる。これは、ガーターと称する靴下留めで、一般に2 m位の長さがあり、のちに膝の上下でクロスして結ぶこともあった。その他、靴紐や刀を腰に下げるために帯状のベルトとしてリボンを用いていた。

このように、今日に用いられる意味でのリボンは、16世紀以降用いられた装飾としてのリボンのことであり、これは手動織機²⁾によって織られた絹、木綿、ベルベット等の細い紐のことをいう。

装飾としてのリボンの導入は、おもにスラッシュを留めるための飾りとして用いられ、規則正しく意匠された切込みにリボンがつけられることにより、そこに装飾性がみられる。

写真9 フランス小姓の服装(1500年)

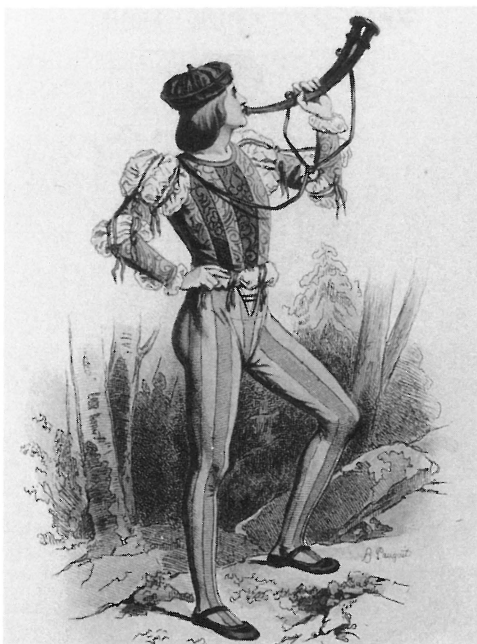


写真10 傭兵スタイル(16世紀初期)



3. モードとリボンの変遷

高度の文化を持ち、政治、経済上の好条件に支えられている場合、その間の服装は周囲を統一し、国際化する勢をもつ傾向があると言われるが、16世紀以降の西洋の服装にはその傾向が明らかにみられ、リボンもモードとともに服装に装飾として配されている。

(1) 16世紀中期から後期

16世紀中期から後期にかけてのヨーロッパにおいては、国力を高めたスペインモードの影響を受け女子服は、ひだ衿（鯨骨入り立ち衿や車輪型ひだ衿）になり、胴着（コルセット）や輪骨（ベルチュガダン）で形づくられた円錐形のシルエットの服装になる。

写真11のスペイン宮廷服は、スカートの前中央を金具付きリボンで互い違いに半蝶結びにして閉じ合わせている。また、開放袖もアクセサリやリボンで飾っているのがみられる。

イギリスのエリザベス1世の肖像画の衣裳（写真12）を見ると、幾つもの蝶型リボンが宝石とともに左右バランスよく飾られ、華麗であり豪華さをかもし出している。

写真13のフランス宮廷服においても、袖のラッシュを蝶結びのリボンで留め、胴から財布や鏡等をつり下げている。当時はこの他にも毛皮、ストール、マフ・扇等をつり下げのためにもリボンが用いられていた。

写真12 イギリス エリザベス1世の肖像画
(1588年頃)



写真11 スペイン宮廷服 (1584年)



写真13 フランス宮廷服 (1586年)



(2) 17世紀前期から中期

リボン飾りが服装に盛んに用いられるようになったのは、近世に入ってからである。17世紀のパロック前期は、イギリスの援助でスペインから独立を遂げたオランダの文化がヨーロッパを支配し、オランダ調の誇張のないゆったりとした服装に変化した。

オランダモードの男子の服装(写真14)⁴⁾にみられるリボンの使われ方は、靴下留めやプールポアンを留めるための蝶結びとして用いたり、また、左側に垂らした長い髪の房や靴の甲の部分に飾るリボンが特徴である。

女性の服装は写真14、15のように、リボンでつくられたバラの花結び(ローゼット)²⁾が両袖の肘の上部や、胸元、あるいはウェストの高い位置にバランスよく飾られている。

写真14 オランダ・モードの男女の服装(1633年)



写真15 花結び飾りの女子服(1635年頃)



(3) 17世紀後期から19世紀後期

17世紀後半は、中央集権をなし遂げたフランス国王ルイ14世のヴェルサイユ宮廷服がヨーロッパ全体のモードの中心となり、服飾雑誌「銅版画」などにも登場した。“パンドラ”と呼ばれる流行服飾品をまとった人形が、パリから毎日のように各地へと送り出されたと言う。

この時代は、装飾過剰な程であり、奇妙な奇抜さが感じられることから「バロック」とも称されているが、特に男性の服装はこれまでになく極度に装飾的傾向が強く現われた。

時の宰相マザランが、金・銀・ブレードの使用など、幾度も贅沢禁止令を出したにもかかわらず、写真16、17にみられるように、プールポアンやラングラーブと称する麻、綿、モスリン、

写真16 バロック後期の紳士服（1660年）



写真17 フランス男子の宮廷服（1670年）



絹などでできたスカート状のもの、太い半ズボン状のもの、あるいはキュロットスカート状のものをゆるやかなズボンの上にはいた。このラングラープの裾・腰、両脇などに色とりどりのリボンループが無数につけられた。また、ギャランと称するリボンの束を何百個もつけ（多くは600個もつけた例がある）、靴下留め（キャノンズ）、帽子、靴、剣にまでふんだんに配され、リボンの装飾はバロックの服装を特徴づける重要な役割の一つであり、その装いは女子にも増して華やかなものであった。

なお、リボンの使用量は身分が高くなる程多く飾り、王侯貴族の男性はリボンを地位の象徴として用いたことが推察される。

1670年頃、プールボアンに代って近代男子服の原型とされる、ジストコルと呼ばれる新型上着が出現した（写真18⁴⁾）。ジストコルの前開き部分には、ボタンとボタンホールを中心に両側に金モールやリボンで意匠され、ローンやレースのクラバットが衿元で蝶結びにされている。また、袖や剣にもリボン飾りがみられる。その後、男性の衣服におけるリボンの装飾は、程んど後退の傾向をたどる。

一方女子服は写真19^{2) 13)}のように、スカートを極端に前で開き両脇でまとめられ、リボンの蝶結びがつけられている。さらに、両肩にもリボンが飾られているが、いずれもスカート裏と共布のサテン地で作られている。また有名なフォンタンジュの結った髪型には、白レースや色もののリボンを用いるのが特徴であった。

写真18 ジュストコル (1700年)



写真19 バロック後期の女子服 (1680年頃)



18世紀のルイ15世新世時代になると、バロックの服装に代って優雅で自由な動きのある服装、すなわちロココ時代が到来する。この時代はサロンの文化ともいえ、イギリスを中心に発展しつつあった自然主義や自由主義の影響を受け、生への快楽と美を求めた時代であった。このサロンの中心は女性であり、その服装は非常に華やかなものであった。

写真20 ポンパドゥール公爵夫人の肖像画(1759年)



女子服におけるリボンの装飾は、ロココ時代に開花され、あふれるばかりのリボン飾りが華やかに配されるようになる。

写真20は、ロココ女性の代表とされるボンパ

写真21 コール・ピケ (18世紀初頭)



ドゥール公爵夫人の肖像画である。リボンはこの時代、おもに女性向きとなり、リボン飾りのネックバンド、胸リボンや胸衣をリボン結びで埋めたエシェルなど、また袖もアンガジャント（レースの三段飾り）とともにリボン結びで飾っている。なお、リボン飾りは首から胸にかけて正面に配するのが特徴であり、大小の組み合わせや配列などにより、その装飾性に優雅さを増している。

また写真21¹⁾は、スカートを張らせるためのパニエとともに下着として着用した、コール・ピケというコルセットである。裾にループ状の白いリボンをつけ、袖には多彩色の房飾りがつき、胸元から裾にかけてリボン飾りが施され、後方でリボンによってしっかり締めて着用された。このようにリボン飾りは、下着にまでもつけられていた。

写真22⁵⁾・23⁴⁾はどちらもロココ後期の宮廷男女の服装であるが、女性はトウルニユール（バスル）型の腰当てにより後方にふくらみをもたせ、共布の大きなリボン飾りでふくらみを一層誇張している。またスカートの全面には、曲線を主にしたロココ調の意匠がなされ、年々大きくなるパニエに並行し、その装飾もリボン飾りや布ひだ飾り、縁飾り、花飾り、レースや刺繍などの手法で繊細で遊戯的に装飾されている。一方男性は、アビ・ア・ラ・フランセーズ（上着）の前を大きく開き、衿元のクラバットから小型のレース飾りや黒絹のタイに移行している。

また、バロック時代にかぶられていた、儀式ばったアロンジュかつらが小さくなり、キュー（弁髪）が流行し、衿元のタイと対のリボンで結ぶのが特徴であった（写真23）。

写真22 ロココ後期の男女の服装



写真23 ロココ後期の男女の服装（1763年）



写真24⁵⁾は踊り子の舞台衣裳であるが、ロココの服飾手法のありとあらゆるものを取り入れた華麗な装飾を見ることができる。中でも色鮮やかなリボンによるキリング（管状に襷を取ったリボンの意）のリボン刺繍がスカートを中心にみごとに施されている。

このように豊富なリボンの供給は、リボン織機の発明によって助長されたのであった。

当時のリボン織機は、手織機を応用したものであり、幾つかのリボンを同時に織れるようにしたもので、機械を運転する人の単一の動作によって、何本ものリボンに遂行される個々の作業が同時に行われるようになっている。写真25のリボン織機をみてもわかるように、窮めて複雑な機械装置であって、発明力の発揮の点で相当な高さを示している。これは、既に1579年ダンツィヒで発明されたが、市参事会は織工の間に失業が起るのを恐れ、発明を押さえつけたが、1621年ライデン（オランダ）にふたたび現われ、17世紀末にはオランダ、ドイツ、スイス、イ

写真24 踊り子の衣裳（18世紀末）



写真25 初期のリボン織機

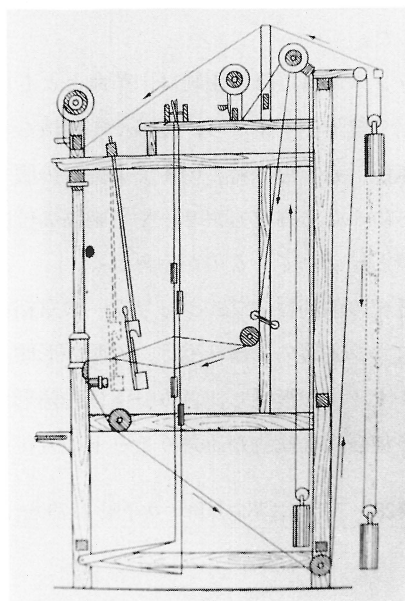


写真26 婦人服小物商（1746年）



写真27 リボン売り（18世紀末）



ギリスおよびフランスで使用された。^{6) 8)}

その後、リボンの需要の増大に応じ、ジョン・ケイらの人々により事実上自動化され、リボンが一層多種多量に生産され、婦人服小物商（写真26¹⁾）やリボン売り（写真27¹⁾）などの登場により、一般民衆にもおよびリボンが取り入れられるようになった。

また、ロココ後期の女子服には、ローブ・ア・ラ・ポロネーズや、ローブ・ア・ラ・シルカシエンヌなどの新型衣裳が多数出現する。その他、髪型や帽子の形があらゆる世間の出来事（時事問題、有名訴訟、大当りをとった芝居）などが装飾として、ひだやリボン飾りなどによって置換された。さらに、リボンの模様には政治上、文学上の事件などが反映したユニークなものもあった。

フランス革命以降の服装は、革命とともに新しく直線的な細いシルエットの自然な形態となり、絹や縞子の不足から、更紗や木綿地も着られるようになった。写真28⁵⁾の女子服は、フランス国旗色（赤・白・青）のインド更紗の服で、パニエは完全に消えて、腰当てだけでスカートの後方にふくらみをもたせ、やや胸高の位置で幅広のリボンサッシュが結ばれ、山高な帽子にも颯爽と結ばれているのがみられる。

19世紀の前期は、ブルジョワジーの富裕な趣味とロマン主義の影響を受け、衣服の形態も再びコルセットが復活し、スカートは釣鐘形になり、多種多様な織物が出廻りモードの変化もし

写真28 フランス革命以降の女子服（1790年）



写真29 皇后と侍女たち（1855年）



写真30 クリノリンスタイル（1850～1870年）



だいに早くなってくる。写真²⁹は、19世紀中頃のクリノリン・スタイルの皇后と侍女たちである。宮廷を中心に、ロココ時代と同様に華麗な服装が復活すると、リボン飾りも大型となり胸元や袖、裾をポイントに飾るようになる。

この時代はミシンの登場によって、段々に切替えたティアード・スカートやプリーツ、フリル、スカラップなどの複雑なデザインをも生み出し、リボンの扱いも写真³⁰のように、幾段にも切替えられたスカートの縁飾りとしても扱われるようになった。こうした機械化の波は、モード産業を発展させる要因となり、イギリス人のシャルル・フレデリック・ウォースが、パリ・オートクチュール組合を結成し、モードを生み出す礎石を築いた。

写真³¹は、この当時誕生した多数の小物類のいくつかである。

特に独立した飾り衿には様々な形があり、色取々のリボンでアクセントをつけ、ドレスに組み合わせ⁷て着用し、着装に変化をもたせた。また帽子も流行し、写真³²のようにモールや羽毛・花などと一緒にリボンを飾り、さらに、リボンは顎下で結んだり後方に下げるなど、かぶりものも非常に華やかであった。

写真31 小物類 (1871年)

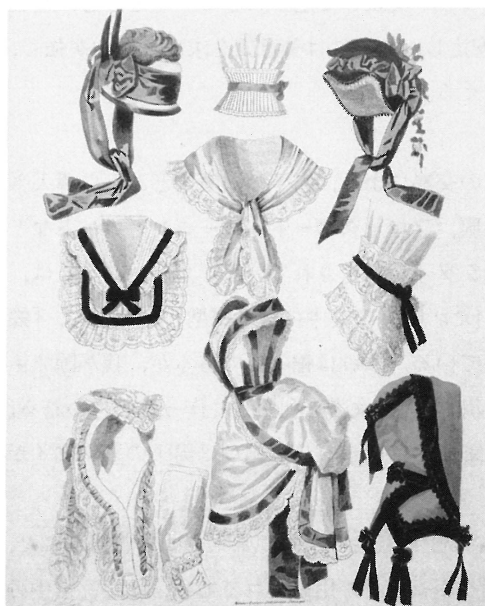


写真32 リボン飾りをした帽子 (1872年)



宮廷女性たちが不自然なクリノリンの着用をやめると、次第にまたトウルニュール型・つまりバスル・スタイルが流行し、これは二部式であり、上着は前開きを左前に合わせボタン止めのものが多く、スカートを後ろの腰の上に引き上げ、この上にドレープを出して束ねた(写真³³)。また、一着の衣服に2・3種類以上の色、素材、装飾技法を組み合わせるのが特徴であった。リボン飾りは、このシルエットを強調するかのように数多くつけられた。さらに室内着(写真³⁴)に至るまで、リボンの変わり蝶結びが後ろ中央、裾に沿って流れるように数

写真33 バッスルスタイル (19世紀末)



写真34 室内着 (1872年)



多く配されるようになる。このように服装における、リボン飾りの定着がここにみられる。

リボンの変遷は、その時代の思想、文化、風潮などが反映して生まれるモードとともに服装に装飾性として用いられ、特に政治、経済などが安定した時期には美意識を求める傾向が強く、リボンによる装飾は、華やかに扱われていたと言える。

4. 日本におけるリボンの導入

日本におけるリボンの導入は、1860年頃欧米との交易により、男子の洋服化とともに導入されている。当時の男性の礼装用の服型として燕尾服、フロックコート、モーニングコートなどが採用され、内側に立衿カラーのシャツに蝶型ネクタイが制定されている。当時ネクタイは、衿飾りあるいは衿締め、ネツキタイと呼ばれていた。制度の文中には「蝶型」のほかに、「蝶結び下げ」すなわち、クラブット形式も用いられている。これは輸入品であるが、我が国でネクタイの製造が始まったのは、明治17年の頃で当初は中古の女帯を利用して作ったと言われる。その後、西陣で25年頃よりネクタイ地を製織しており、このように蝶結びは男子のネクタイから導入されている。

女性の服装については、明治16年頃鹿鳴館において上流社会の一部の婦人の間で着用された、バッスル・スタイルにサッシュ（結び帯）としてリボン飾りが用いられており、また、宮中の女子礼装用のロングドレスにもリボン飾りがみられたが、当時はいずれも輸入服であり服飾のリボン飾りは、上流階級の女性の服装のみに導入されている。

リボンが一般の女性に装飾され始めたのは、髪飾りであり、明治18年頃より流行した束髪に幅広のリボン結びがつけられるようになった（写真35）⁹⁾。

このリボンの流行により明治27年、東京谷中にリボンの製作所が設立され、写真36¹⁰⁾のように女学生の矢羽根着物に袴スタイル、網み上げ靴をはき、長い髪にリボンを結んだ和洋折衷のスタイルが若い女性にリボンモードとして着装されたのである。リボンは明治以降、時代の変遷

写真35 結髪のリボン飾り



写真36 明治の女学生（明治40年頃）



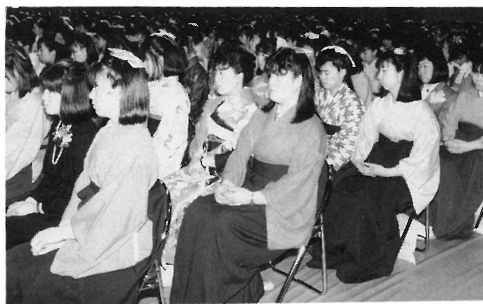
とともに服飾や髪飾りの装飾をはじめ、その他贈答品の外装としても利用されている。

写真37は、昭和62年女子短大の卒業式の模様である。このように、明治の女学生同様、髪にリボンをつけた袴スタイルが流行している。

写真37 卒業式のスタイル（昭和62年）

特に近年、ファッションとして、リボンが服装や髪飾り、アクセサリなどにも取り入れられており、そのデザインは懐古調とも思われ華やかであり、優雅さを表現している。

写真38,¹¹⁾39は、'87春夏パリオートクチュール・コレクションに出品されたココ・シャネル



の作品である。写真38は、水玉のドレスに小型のリボンが布地の模様のように数多くつけられ、また写真39は胸元とドレスの裾にリボンがトリミングされ、大型のリボンがつけられているのがみられる。今日では、イヴニング・ドレスには欠かせないアクセントの一つになっている。

このようにリボン飾りは、モードとして服飾に取り入れられ、特に若い女性の服装の装飾として盛んに用いられている。

Ⅲ ま と め

以上、リボンについて西洋服装史からまとめると、次のような結果になる。

1) リボンは縛るという意味から、带状の結び紐として、ヨーロッパにおいては新石器時代

写真38 '87春夏パリコレクションより

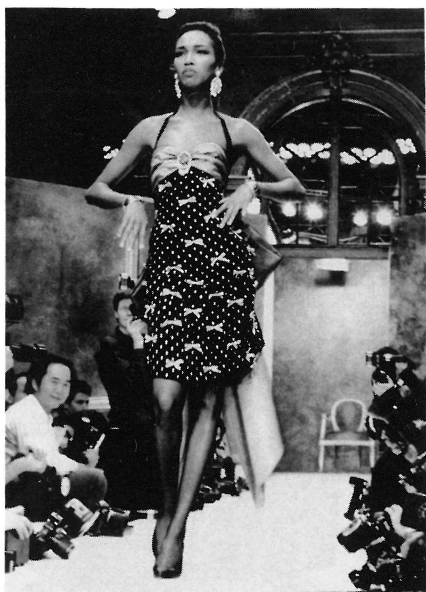
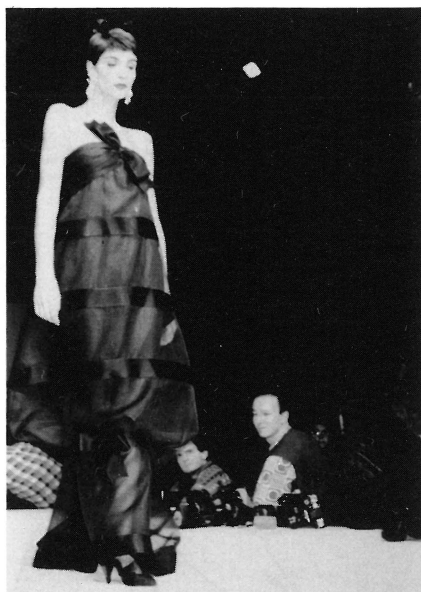


写真39 '87春夏パリコレクションより



（紀元前3000年～1000年頃）の男女メンヒル（立石像）や、古代オリエントのエジプトの高貴な男女が幅広の帯を前結びに垂らしていたことなどからリボンの起源は、既に紀元前より結び紐として使用されていた。これらの形はサッシュ（帯）型、ループ型、またはボー型に分けられ機能としては、実用性と装飾性の二面を持っている。未開社会の裸族が腰紐一本を体に巻き、武器や獲物をぶらさげる実用性、長い裾をたくし上げ行動しやすくするなど機能性にも用いられている。また、リボンはおもに上流社会の人々や、王侯貴族に用いられ長さや幅など多量の装飾により、高貴な身分や権力、または威厳などを示す標として使用されていた。

2) リボンが、装飾として服飾やアクセサリに用いられるようになったのは、16世紀以降で、手動のリボン織機の出現からであるが、既にゴシック時代の男女の服装にもみられ、当時代を代表する女性の衣服の他、エナン帽や男性のマントル、帽子などにも装飾としてリボン飾りが使用されていた。特に服飾上、装飾性が顕著に現われたのは、17世紀のバロック時代男性の服装であり、ラングラーブ、ガーター、帽子、靴に至るまで飾られ、女性の服装に増してリボン飾りは華やかであった。

女性の服装や髪飾り、その他アクセサリにリボンが華やかさを増したのは、18世紀のロココ時代で、ローブ、帽子、靴に至るまで装飾され、ネックバンド（首飾り）や腕輪などとともに、リボンは女性の装飾用として優雅に飾られた。その後さらに、19世紀のロマンチック時代には、より豪華な服飾として宮廷服に顕著にみられた。

3) リボンの素材については、古代では皮、亜麻、羊毛などの織布や裂き布（糊付け）が使用されていたが、その後リボンの手動織機が出現し、さらに1765年頃には織機も自動化され、素材もグログラン、ピコット、ベルベット、サテン、タフタ、その他柄物など多種多量になり、

リボンも服飾のモードとともに、より装飾として一般の人々にも普及した。

4) 日本におけるリボンの導入については、1860年頃欧米との交易により男子の洋服化にともない礼装用として燕尾服やフロックコート、それに蝶ネクタイのスタイルが基本型であり、当時ネクタイは輸入であるが、衿飾りまたは衿締めとして制定され、官史をはじめ上流階級の男性のタイに蝶結び（ボー）やクラブットとしていち早く導入されている。

女性の服装にリボン飾りとして用いられていたのは、鹿鳴館時代であり上流社会の婦人や宮中の女子礼装用イヴニング・ドレス（パッサルススタイル）に、装飾としてリボン飾りが用いられている。

また一般に用いられるようになったのは、当時流行の束髪に幅広のリボンを蝶型に結びこれにより、若い女性の矢がすりの着物に袴スタイル、長髪にリボン飾り、網み上げ靴をはいた和洋混合スタイルが、明治のハイカラスタイルまたは女学生スタイルとして流行した。

このようにリボンの変遷をみると、その装飾性については、時代的背景や上流社会における服飾のステイタスシンボルとして導入され、階級や身分などのシンボルと同時に装飾として、男性、女性の服装やアクセサリにリボンは取り入れられて来ている。

しかし、今日においてはリボンは服飾のみならず日常の必需品として、冠婚葬祭などの贈答品の外装として種々用いられている。特に近年はリボンが流行し、服装をはじめ髪飾りやアクセサリなどにもリボンブームが起っている。1960年代後半頃よりユニセックスとして、男女共通の服装がファッションの主流であったが、最近は男性の服装もファッション化し、内容においてもより男らしくみえるためのメークまで出現している。また女性の服装も、より女らしいのイメージで従来の肩パットの形も次第にナチュラルラインになり、昭和40年代のミニ丈、ショート・フレアスカートなど、小さなボディできゃしゃなフェミニティ（女らしさ）なスタイルへと変化しつつある。モードの中には、ミニスカートにガーター（靴下留め）などが出現し、レトロ（懐古調）モードが再び復活しはじめて来ている。

本学においても、卒業式などに袴スタイルにリボン飾りが流行しており、これらのリボン飾りは、日本だけではなく今日の世界のトップデザイナーのオートクチュール（高級衣装店）やプレタポルテ（高級既製服）などにも取り入れられている。

このように懐古調や女らしさ、そしてリボンブームがなぜ流行するのか、その美意識などメンタリティーについて調査研究を続けたいと思う。

本研究は、本年5月日本服飾学会において発表したものである。

梶浦善次学長先生のご退任にあたり、在職中にご指導をいただきましたことを心から感謝申し上げます。今後のご健康と増々のご活躍をお祈り致します。

引用・参考文献

- 1) フランソワ・ブージェ：西洋服装史，文化出版局，1973
- 2) J. Anderson・Black・Madge Garland：ファッションの歴史，上下，PALCO，1978
- 3) 村上憲司：西洋服装史，関西衣生活研究会，1982
- 4) PAVQUET FRÈRES：MODES ET COSTUMES HISTORIQUES，1877
- 5) 石山 彰：FASHION PLATES 西洋服飾版画，文化出版局，1974
- 6) 丹野 郁：服飾の世界史，白水社，1985
- 7) 岡田 譲・伊藤紀之・景平一恵：19世紀ヨーロッパファッションプレート，講談社，1980
- 8) S・リリー：人類と機械の歴史，岩波新書，1953
- 9) 遠藤 武・石山 彰：図説日本洋装百年史，文化服装学院出版局，1962
- 10) 婦人画報社：婦人画報創刊70周年記念 ファッションと風俗の70年，婦人画報社，1975
- 11) Natsuko Yamada：Panorama de La Mode，Université de la Mode，1987
- 12) R・L・ピセツキー：モードのイタリア史，平凡社，1987
- 13) 飯塚信雄：西洋（服装）と（手芸）の歴史，日本ヴォーグ社，1975
- 14) 井上泰男・匠 秀夫：衣服の文化史 美術史との交響，研究社出版，1978
- 15) 南 静：パリ・モードの200年，文化出版局，1975
- 16) 田中千代：田中千代服飾事典，同文書院，1969
- 17) 丹野 郁：総合服飾史事典，雄山閣，1980
- 18) 被服文化協会編：服装大百科事典下巻，文化服装学院出版局，1969
- 19) 北村哲郎：日本服飾小辞典，源流社，1979
- 20) 石山 彰：服飾辞典，ダヴィッド社，1972
- 21) C・W & P・Cunnington：A DICTIONARY of ENGLISH COSTUME 900-1900，FABER AND FABER LIMITED，1963
- 22) C・Willett & Phillis・Cunnington：Hand book of English Costume in the Sixteenth century，FABER AND FABER LIMITED，1963
- 23) C・Willets & Phillis・Cunnington：Hand book of English Costume in the Seventeenth century，FABER AND FABER LIMITED，1963

(1987・9・19)